

月刊 星ナビ

6月17日 火星が
レグルスに超ニアミス

6 2025
June

超高感度ミラーレスで録る 星景リアルタイム動画

星の街道をゆく ドイツ・イエナ/ベルリン/ハンブルク

はじまりのプラネタリウム

三都物語



NHK大河ドラマ「べらぼう」で注目
浮世絵に描かれた月と星

連載小説「オリオンと猫」第4回
峯の三角標と三日月

Deepな天体写真

CMOSカメラのノイズの種類と原因究明

舞台は国立天文台野辺山 劇場版「名探偵コナン 隻眼の残像」
プラネ100周年グランドフィナーレ IPS2026福岡大会まで1年
連休の夕方の西空で肉眼彗星になる!? SWAN彗星 (C/2025 F2)
星の召すまま プラネタリウム工作キットで遊んでみた

せきがん フラッシュパック

星空への道標 撮影／前田徳彦

CONTENTS



■今月の表紙

星空への道標
撮影／前田徳彦

NIKKOR Z 14-24mm f/2.8 S
(24mm F2.8) Nikon Zf ISO3200
露出8秒 群馬県嬬恋村にて

薄明の時間に青く変化する空。消えゆきて座の天の川。それをリアルタイム動画で狙うジンバルに載せたSONY α7SⅢ。カメラにピントを合わせて星をぼかしました。わかりにくいですが、道の先には雪の浅間山があります。ジンバルのシリアルが星空に向かっており、見る者の視線を夜空へ誘導することから写真のタイトルを「星空への道標」としました。

■広告asakiyin

コニカミノルタプラネタリウム／表2
ケンコー・トキナー／6
ワイルド・ナビゲーション／10
TOMITA／66
アイペル／68
シユミット／70
ケンコー・トキナー サービスショップ／72
笠井トレーディング／82-87
ウィリアムオプティクス／102
ピクセン／114～表3
五藤光学研究所／表4
AstroArts／8, 14, 49, 74, 76
AstroArtsオンラインショップ／88～91

星ナビ2025年6月号
2025年5月2日配信

24



高感度ミラーレスで光と音を録る 前田徳彦

星景リアルタイム動画

撮影／前田徳彦

32 Deepな天体写真 CMOSカメラのノイズ研究1 あぶらなーと
32 ノイズの種類とその原因の究明

38 プラネタリウム100周年フィナーレ！
38 2026年に福岡で国際大会開催 井上 穀・田部一志

42 星の街道をゆく プラネ三都物語 中山満仁
イエナ・ベルリン・ハンブルク

CELESTIAL HISTORIES お江戸の夜空に星が舞う
50 天文外史 浮世絵に描かれた月と星 塚田 健

56 連載小説「オリオンと猫」第4回 濑名秀明
野尻抱影と大佛次郎物語 峯の三角標と三日月

News Watch

4 宇宙関連施設が「名探偵コナン」の舞台に 劇場版&プラネ



100周年フィナーレ (p.38)



プラネ三都物語 (p.42)



アストロ孔明さん (p.73)



VTuberが野辺山研究員に (p.75)

NEWS CLIP 石川勝也

7, 9 Observer's NAVI 変光星 高橋 進 78

由女のゆるゆる星空レポ 星の召すまま

11 天文・宇宙イベント情報 パオナビ 79

最新宇宙像 沼澤茂美+脇屋奈々代

12 Observer's NAVI 新天体・太陽系小天体 吉本勝己 80

6月の星空 篠木新吾

15 星ナビひろば 92

6月の月と惑星の動き

18 ●ネットよ今夜もありがとう 93

6月の天文現象カレンダー

20 ●会誌・会報紹介 94

6月の注目 あさだ考房

21 ●やみくも天文同好会 藤井龍二 96

新着情報

64 ●飲み星食い月す 96

月刊ほんナビ 原智子

67 ギャラリー応募用紙／投稿案内 97

三鷹の森 渡部潤一

69 奥付／編集後記 98

アクアマリンの誌上演奏会 ミマス

71 オンラインショップ連動 買う買う大作戦 99

ブラック星博士のB級天文学研究室

73 KAGAYA通信 100

天文台マダムがゆく 梅本真由美

75 星ナビギャラリー 103

天文学とプラネタリウム 高梨直紘＆平松正顕

77 銀ノ星 四光子の記憶 飯島 裕 112

高感度ミラーレスで光と音を録る 星景リアルタイム 動画

文・写真・動画 ◎ 前田徳彦

星空がきれいに見える場所での情景をどうすれば伝えることができるか？ひとつつの方法は、数秒から数十秒の長時間露光を行った「星景写真」、もうひとつつの方法は、5月号で中川達夫さんが解説されていた「星景タイムラプス動画」。そして、第3の方法が今回紹介する「星景リアルタイム動画」だ。ミラーレスカメラの高感度化で実現したこの表現方法では、星空を包みこむ全情景とその場の音までも記録することができる。今月号では、7年前から星景リアルタイム動画を録り続けてきた経験をもとにそのテクニックを解説していこう。

前田徳彦 (まえだ のりひこ)

埼玉県上尾市在住 日本星景写真協会正会員 猫のいる星空☆cafe 著作に「星空風景(誠文堂新光社)」「星空のある風景カレンダー2025(翔泳社)」など

48年前から星空撮影。今は星景写真やリアルタイム動画を撮影してブログ、YouTube、SNSで公開しています。SNSでは @starwalker0202



BLOG,SNS
<https://lit.link/starwalker0202>

春の花と星空の間で

ジンバルに載せたSONY α7S IIIで星空のリアルタイム動画を撮影。見ごろを迎えたミツマタに囲まれ、黒いシルエットの林の上に夏の大三角が昇る。ゆっくりとジンバルを動かし星の動きを静かに追っていきます。

NIKKOR Z 14-24mm f/2.8 S(16mm F2.8) ニコン Z f ISO10000
15秒露光 2025年4月5日03時04分

星景リアルタイム動画

YouTubeなどで「星の動画」と呼ばれているものの多くは、実は数百枚から数千枚の写真を連続してつなぎ合わせた「タイムラプス動画（先月号で特集）」です。タイムラプスでは、時間を圧縮することで星の動きをドラマチックに表現できる一方、実際には「高速再生された写真」なので、星空をリアルタイムで見るようすとは異なる面もあります。

これに対し、デジタルカメラの動画機能を使って星空をそのまま撮影したものを、ここでは「リアルタイム動画」と呼んでいます。「リアルタイム」と聞くと生中継のようなイメージを抱くかもしれません、本稿で扱うものは事前に撮影し、あとから動画編集する形式ですので、生放送のようなライブ配信とは異なります。むしろ、星空が実際に動いているようすを映像として連続的に捉える点に特徴があるといえるでしょう。

シャッター速度1/24～1/15秒で星空動画を録る

ご存知のとおり、星を動画で撮影するのは決して容易ではありません。静止画（スチル写真）で星空と夜の風景を撮る「星景写真」では、星というひじょうに暗い被写体を捉るために、たとえばシャッター速度30秒・絞りF2.8・ISO 6400といった条件でようやく写せるレベルです。ところが動画（ムービー）で星空を録る場合は、シャッター速度が1/24～1/15秒という極めて短い時間に限定されるため、通常の機材では感度が足りず撮影できないのが現状です。

現行の市販カメラではまだ高感度性能が追いつかず、理想的な画質を得るのは難しい点が多々あります。しかし一方で、こうした制約の中でも、新しい映像表現の可能性をリアルタイム動画に大きく感じています。

私自身、2018年11月にSONY α7S IIを、2020年10月にSONY α7S IIIを導入し、さまざまな試行錯誤を繰り返しながら星空のリアルタイム動画を撮影してきました。ここでは、そうした経験の一端を紹介し、現在の撮影機材や編集方法の限界と魅力についても触れたいと思います。

星景動画

タイムラプス動画

数百枚から数千枚の写真を連続してつなぎ合わせて制作

- 画質がきれい
 - 星の動きをドラマチックに表現
 - ほとんどのデジカメで撮影可能
 - カメラ内やフリーソフトでも制作可能
- 長時間露光が必要
 - リアルさには欠ける

リアルタイム動画

超高感度が使えるデジカメの動画機能を使って撮影

- 目で見たものに近い星空表現
 - 流星がたくさん写る
 - 環境音を入れることができる
- 一部のカメラでしか撮影できない
 - 画質はまだ発展途上
 - 機材が高価

星空を撮影する

長時間露光が必要な星景写真では三脚にカメラを固定して撮影する必要があるが、星景動画では手持ちで動きを見せる表現方法を用いることもできる。



スチル画像・星景写真

秩父の夜景が広がる展望台に向かう階段から昇るオリオン座を狙いました。空が明るい場所なので露出も短めです。

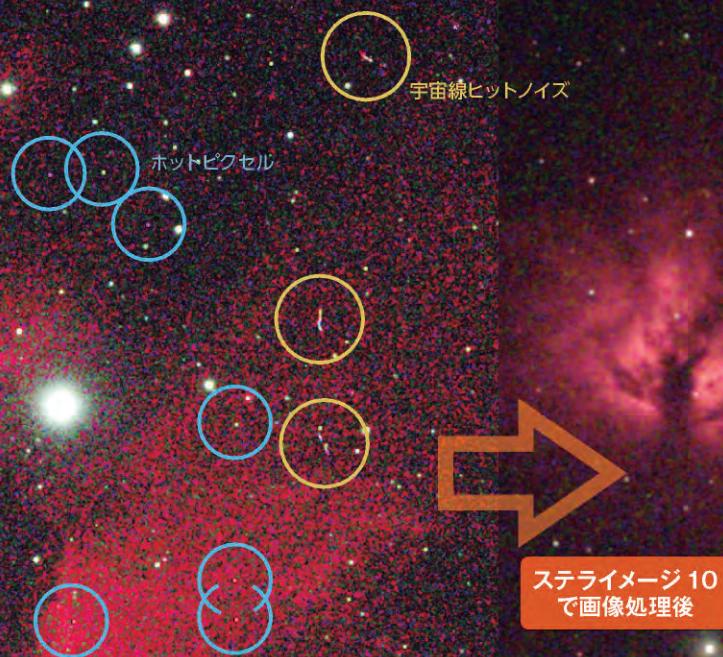
NIKKOR Z 14-24mm f/2.8 S(24mm F2.8)
ニコン Z f ISO4000 10秒露光 LeeNo.1



星景リアルタイム動画

リアルタイム動画では、空が明るい場所の方が、天の川が見えるような暗い場所よりも撮りやすい環境となります。

SONY24mmF1.4(F1.4) SONY a7S III
ISO204800 シャッター速度1/24秒



ノイズを知り処理を知れば 画像危うからず

星雲や銀河など淡い天体を創意工夫で鮮明に写し取るDSO撮影は、
天体写真の中でも非常に人気の高いジャンルです。
より鮮明な像を得るには「良質な機材」「良好な星空」「適切な運用」などが必要とされますが、
デジタル技術の発展とともに主流となった「天体用 CMOS カメラ」によって、
撮影の難易度は飛躍的に下がりました。
それでも、美しい作品作りを阻害する天敵が存在します。それがさまざまな種類のノイズです。
今回は、私が日ごろ格闘している各種ノイズとその発生原因を解説します。



解説 ◎あぶらなーと
← ブログ

深い天体の撮影を邪魔する さまざまなノイズたち

デジタル技術の発展とともに、天体写真撮影に用いられるカメラもフィルムカメラからデジタルカメラへと完全に移行しました。その中でも、現在のアマチュア天文家たちに人気なのが、いわゆる天体用CMOSカメラです。実際にはミラーレス一眼やスマートフォンなどでも撮像素子にCMOSセンサーを用いるのが主流ですが、便宜上、ここでは天体写真撮影用の専用カメラを特に「CMOSカメラ」と呼ぶことにします。

CMOSカメラの最大の特長は「星雲が鮮明に写る」ことです。星雲が放つ主要な光である波長656nmのH α 線を含め、赤～近赤外の波長の光は肉眼ではあまり感じませんが、CMOSセンサーは近赤外まで高い感度を持つため、一般的の写真では色再現性などを阻害します。そこで一般的なデジタルカメラにはこの波長域を減光／カットするフィルターが内蔵されています。そのため赤い星雲が鮮明に写りません。それに対してCMOSカメラはH α 線を十分に通す仕組みになっており、短い露光時間でも星雲撮影が楽しめます。

ところが、CMOSカメラを用いても作品を台無しにしてしまうさまざまなノイズが発生します。順番に見てきましょう。

画像②では、星雲画像全体がザラザラになっています。これが「光子ショットノイズ」です。画像③では、画像全体に明るい縮緬(ちりめん)皺状のノイズが見られます。これが「白い縮緬ノイズ」です。画像④では、画像全体に暗い縮緬皺状のノイズが見られます。これが「黒い縮緬ノイズ」です。画像⑤では、人工衛星でも流星でもない奇妙な像が写っています。これが「宇宙線ヒットノイズ」です。

画像1(左) CMOSカメラ画像に現れるノイズと、ステライメージ10での処理例

左右の画像は、どちらもFMA135 + LeXtremeフィルター + Neptune-C IIでゲイン280・16秒露光で撮影したもの。左の画像はライトフレームを32コマ用いてコンポジットしたものだが、黄色でマークした部分に「宇宙線ヒットノイズ」、青色でマークした部分などに「ホットピクセル」が見られ、「光子ショットノイズ」の影響で画像全面がザラザラしている。右の画像はライトフレームを512コマに増やし、ダークフレームを256コマ併用したもので、「ステライメージ10」の新機能である「クールファイル補正法」「ピクセルマッピング法」「コスミックカット法」などを用いて画像処理したため、ほとんどのノイズが消失している。

トノイズです。画像⑥では、不規則な明るさの光跡が写り込んでいます。これが「酩酊ピクセルノイズ」です。

ノイズを殲滅するためには、まずこれらのノイズがどのような原因で発生しているのかを知る必要があります。影響が大きい順にそれぞれ見てきましょう。

殲滅優先度1 「光子ショットノイズ」

天体写真に限らず、一般的な写真においても露出不足気味となった場合に画像がザラザラになることがよく起ります。画像⑦は16秒露光した馬頭星雲付近をトリミングした1コマ画像ですが、星雲がノイズに埋もれて不鮮明になっていることがわかります。このノイズは俗に「高感度ノイズ」と呼ばれることが多いのですが、じつはカメラが悪いのではなく単なる自然現象です。

重要なのは「暗い光はエネルギーが低い」のではなく、「暗い光はスカスカ」だという点です(図1)。天体から飛来する光は波としての性質とともに粒子としての性質を持っています。デジタル写真においては、この粒子としての性質が強く効くため、露光量が不足した場合に光子(光の粒)の濃淡(密度)がノイズとして現れます。これが「光子ショットノイズ」です。

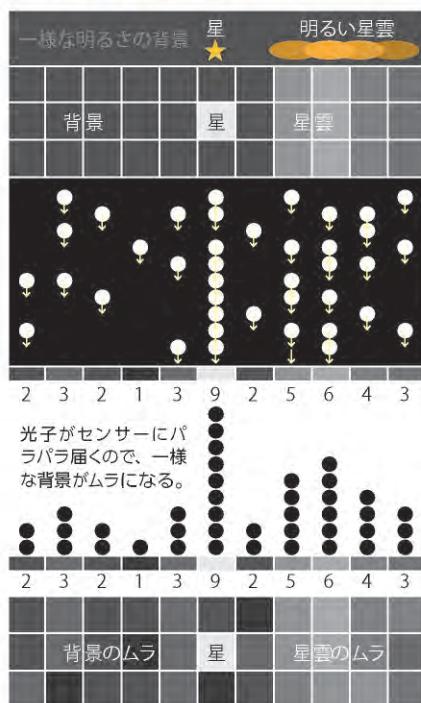
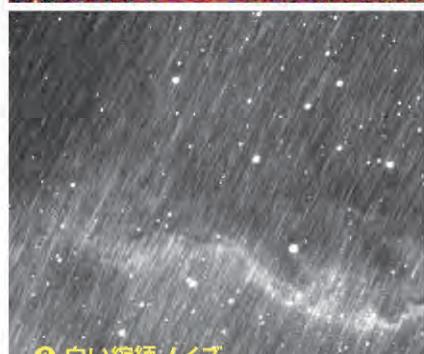


図1 光子ショットノイズの概念図

暗い天体は、飛来する光の粒(光子)がまばらになっている、短い露出時間ではセンサーに届く光子の数にバラツキが出て、画像上ではムラになる。



2 光子ショットノイズ



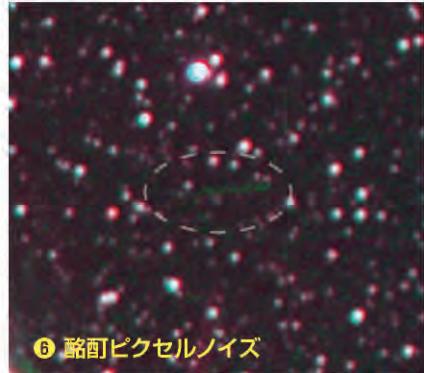
3 白い縮緬ノイズ



4 黒い縮緬ノイズ



5 宇宙線ヒットノイズ



6 酔酔ピクセルノイズ

100

プラネタリウムは終わらない

100周年フィナーレ！ そして国際大会2026へ

1923年10月21日、ドイツの街に「真昼の星」が灯り
近代的なプラネタリウムがその第一歩を踏み出してから1世紀。
2023年10月に始まった「プラネタリウム100周年」も
いよいよクライマックスを迎える。
世界をつなぐフィナーレ・イベントで盛り上がるとともに、
2026年に福岡で開かれる国際大会、そして次の100年に向けて踏み出そう。



プラネタリウム
100周年



この画像は、プラネタリウム100周年プロモーション動画のワンシーン。ドイツからやってきたプラネタリウムが日本各地に広がる様子を2分でまとめたもの。プラネタリウム100周年のサイトで見ることができる。(提供／日本プラネタリウム協議会)

2023年10月の全国一斉イベント。
平塚市博物館での配信投影の様子。

小惑星「イトカワ」「リュウグウ」のダブルサンプル全国巡回展のきっかけとなった、明石市立天文科学館での企画展講演。

25周年を迎えた「すばる望遠鏡」とのコラボイベントも実施された。名古屋市科学館にて。

提供／平塚市博物館

提供／明石市立天文科学館

提供／名古屋市科学館・プラネタリウム100周年記念事業実行委員会・国立天文台ハワイ観測所



世界で、日本で、クライマックスをともに祝う

“真昼の星誕生”から1世紀 世界的なアニバーサリー

プラネタリウム100周年事業がいよいよクライマックスを迎える。近代プラネタリウムが誕生し、ドイツ博物館で試験公開されたのは1923年10月21日。その2年後の、1925年5月7日に同館に常設された。この節目を祝い、2023年から25年にかけて、世界各地で様々なプラネタリウム100周年の記念イベントが行われ、国内では日本プラネタリウム協議会（JPA）が記念事業を推進してきた。

実行委員会では、ロゴマークやポスターなどを制作、2023年10月21日には全国のプラネタリウム館を結んだ一斉イベント「みんなで見上げよう100年前の星空」を開催し、ドイツからの中継を行ったり、100年前の星空を全国のプラネタリウムで同時に投影するなど前例のない取り組みを実現した。この他にも、JAXA「はやぶさ2拡張ミッションチーム」との連携した講演会や、イトカワ、リュウグウの貴重なサンプルの全国巡回展示、国立天文台ハワイ観測所すばる望遠鏡25周年とコラボした全国一斉イベント（2024年10月19日）も行われた。また、300を超える公認企画も行われ、総参加者は100万人を超えていた。プラネタリウム館のみならず、タカラトミーのプラネタリウムのミニチュア模型（カプセルトイ）などプラネタリウム業界以外の民間企業も参加するなど幅広い事業が行われ、市民

にプラネタリウムを通じて天文学や宇宙開発への関心を高める契機となっている。本誌でもいろんな形で紹介してきた。

世界各地、日本各地の プラネタリウムをつなぐ

そして2025年5月、フィナーレ・イベントが企画されている。国際イベントは5月7日に開催される国際プラネタリウム協会によるオンライン記念行事で、各国のプラネタリウムを結んだ中継が行われる。日本は、明石市立天文科学館のプラネタリウムを中継会場として参加することが決まっている。オンラインでだれでも見学することができる。ただし時差に注意。世界時5月7日（水）18時＝日本標準時5月8日（木）午前3時だ。アーカイブも残されるので、深夜なので無理せず後日改めて気軽に見てほしい。

日本では5月24日（土）に「全国一斉プラネタリウム100周年フィナーレ・イベント」が開催される。全国30施設以上のプラネタリウムをオンラインで結ぶ予定だ。内容は盛り沢山である。プラネタリウム100年の歩みを振り返るオープニングトークで幕開け。その後プラネタリウムや星にまつわるクイズを用意している。

注目は「全国リレー解説」だ。解説のスタートは日本初のプラネタリウム「大阪市立電気科学館」のレトロ解説。実際に使われた星空案内原稿をもとに、当時の雰囲気が現代によみがえる。その後、全

紹介◎井上毅
(明石市立天文科学館)



世界各地のプラネタリウム解説者が星空解説を次々にリレーする。かつてない豪華企画だ。過去から未来へ。フィナーレにふさわしいチャレンジングな企画である。

当日19時から50分間の全国共通タイムのほか、前後には各施設で独自のイベントが実施される。また、YouTubeでも全国にライブ配信され、自宅でもフィナーレを楽しむことができる。詳細はプラネタリウム100周年のウェブサイトを参照してほしい。誕生100年をみんなで祝うまたとない機会である。多くの人々に楽しんでもらえることを願いながら準備を進めている。

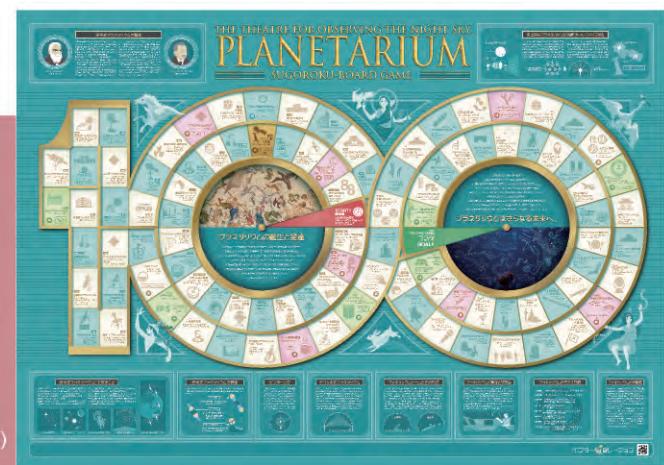
リリース目前！遊びながら歴史がわかる 100周年記念ポスター

天文教育普及活動を中心とした若手研究団体「インター^{そら}宙ぼレーション」による記念ポスター計画が進行中。「プラネタリウム関係者として、近代プラネタリウム100周年の機会に何かしたい！」そんな思いから作られたポスター。アイキャッチとなる中央の“100”はすごく風になっていて、プラネタリウムの歴史を辿れるようになっている。アイジンガー・プラネタリウムカラーを基調としたレトロポップなデザイン。リリースに向けてクラウドファンディングを予定。参加者にはお楽しみ特典あり！ぜひ、ご協力をお願いいたします。

近代プラネタリウム 100周年記念ポスター



- サイズ：B1 (728×1,030 mm) ■価格：1000円（初期価格）
- クラウドファンディング：5月7日（水）～7月7日（月）
- 詳細：インター^{そら}宙ぼレーション web サイト <https://intersapo.wpxdomain.jp/>
- オンラインお披露目イベント：5月8日（木）申込・詳細 <https://www.tenpla.net/?p=2128>



イエナ・ベルリン・ハンブルク プラネタリウムの最初の足跡を辿る旅

プラネタリウム・ハンブルク
(Planetarium Hamburg)
1930年作成の天井画。

* Jena · Berlin · Hamburg * 星の街道をゆく

プラネ三都物語

2023年、ドイツ北西部のブルッフハウゼン=ヴィルセンを訪れた私は、失われたと思われていた2機目のカールツァイスI型と、それを見つけ出し現代に甦らせた星と機械を愛する情熱溢れる人々に出会った（ムック「ようこそプラネタリウムへ」に掲載）。世紀を越えて映し出される最初の地上の星を見た時、プラネタリウムの始まりの物語をもっと深く知りたいと思った。今回の旅では、プラネタリウムの最初の足跡を辿って、ドイツの「プラネ三都」に出かけた。

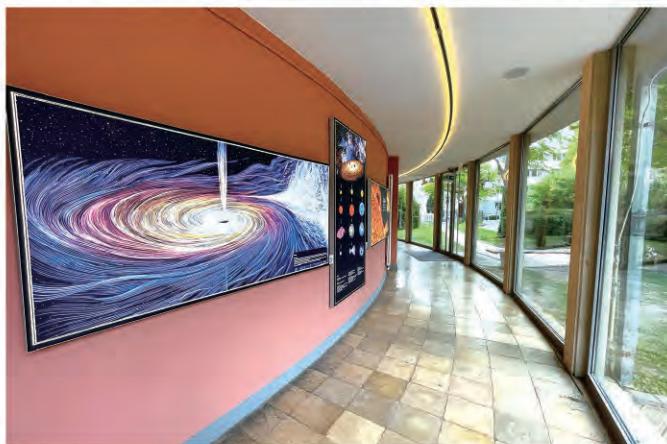
中山満仁 なかやま みつひと

プラネタリウムライター。1976年熊本県生まれ。日本と世界各地のプラネタリウムを鉄道で駆けめぐらして紹介する活動を続けています。
X / Instagram @mitsuto1976



今から1世紀前の1923年夏、ドイツで生まれた世界初の近代的プラネタリウム投影機は、人類が初めて見る星間の星空を直径16mの仮設ドーム内の暗闇に映し出した。生まれたばかりの投影機はドイツ南部バイエルン州の州都ミュンヘンで開館準備中のドイツ博物館に運ばれて1923年10月21日に関係者向けの実演投影を実施、「イエナの驚異」と讃えられた。

やがて、世界各地の星空を投影することを可能にした改良発展型の投影機「カールツァイスII型」が開発され、1926年にバルメン（現在のヴッパータール）、ライプツィヒ、イエナ、ドレスデン、そして首都ベルリンとドイツ国内各都市に建設された新しいプラネタリウム投影館に設置されてそれぞれの地で活躍を始める。しかし、折しもドイツではアドルフ・ヒトラー率いる国家社会主義ドイツ労働者党（ナチス党）が台頭し始め、生まれたばかりの「地上の星」たちも否応なしに歴史の激流に巻き込まれ、やがて数奇な運命を辿ってゆく



ツァイス・プラネタリウム・イエナ。投影機の開発者でもあるカールツァイス社の天才技師ヴァルター・バウワースフェルトによって開発された独自の吹付けコンクリート工法で建造されたドームは約8000本の鋼棒のメッシュ構造に打設された厚さわずか6cmのコンクリート層で形成されており（上）、バルメン（1926年5月18日）、ライプツィヒ（同年5月20日）に続くカールツァイスII型投影機を備えた3つめの常設館として1926年7月18日に開業、以来一世紀近くにわたり投影を続けている。

事になる。今回は、そんなプラネタリウムの始まりをたどって、ドイツのイエナ・ベルリン・ハノブルクの「プラネ三都」に出かけよう。

2023年5月2日 イエナ プラネタリウムが生まれた街

まずは、プラネタリウムが生まれた街・イエナに向かう。ハノーヴァー中央駅から乗車したドイツ鉄道DBのインターナショナル特急をハレ（ザーレ）で快速列車（右上）に乗り継いで約1時間、ザール川沿いの峡谷に広がるイエナは人口約10万人、16世紀からの歴史ある大学都市だ。

ドイツ各地やウィーンで修行を積んだワイマー生まれの見習い職人カール・ツァイスがこの街に工房を構えて顕微鏡の製作を始めたのは1846年の事だった。ツァイスがたった一人で始めた工房はイエナ大学の物理学講師エルンスト・アッペを共同経営者として迎えて科学的な光学理論に基づいた高品質な顕微鏡を生産する

ようになって急成長を遂げ、やがてドイツを代表する世界的光学機器メーカー「カールツァイ



ハレからイエナ方面へと向かうドイツ鉄道DBの快速列車。イエナは投影機を開発したカールツァイス社の本社工場のあるドイツ中部テューリンゲン州の都市である。

ス社」へと発展していく。

1924年、カールツァイスI型投影機を開発したカールツァイス社は「イエナの驚異」への反響の声の大きさに応えるべくドイツ各地にプラネタリウムの常設投影館の建設を計画し、本社工場のお膝元イエナにもドーム径23mの「ツァイス・プラネタリウム・イエナ」（右下）の建設が始まった。

投影機は1969年にII型からUPP 23/7に、1985年にはZGP（Cosmorama）に、そして1996年からはUniversarium VIII型に代替わりしており、さらに全天周映像のデジタル投影も可能な最新の設備を持つ施設として進化を遂げているが、ドームと建屋は今も1926年の開業当時の姿を留



あなたの街の星の劇場

ようこそ プラネタリウムへ

全国
プラネタリウム
マップ収録

一冊まるごと プラネタリウムBOOK

首都圏プラネタリウム巡り そうだ! プラネに行こう
170施設超えの猛者が出会った 推しプラネタリウム
メカな機材に激萌え プラネタリウムここが“尊い”
あなたの街の星の劇場 全国プラネタリウムマップ
プラネタリウム100年史 星を創る機械の誕生
日本にプラネタリウムの星が灯った日
太陽系から宇宙の果てまで自由自在 デジタルの星の40年
国産プラネタリウムの源流
プラネタリウム解説者になる
ウクライナの星あかり 戦禍のプラネタリウムは今
プラネタリウムの生まれた街 イエナ
ZEISS I型2号機が現役稼働中 ルッフハウゼン=ヴィルセン
海外のプラネタリウムで勉強したい!

- 定価1,800円(本体1,636円+税)
- 編集・発行／アストロアーツ
- 発売／KADOKAWA

お求めは全国の書店・望遠鏡ショップ・
アストロアーツオンラインショップで



プラネタリウム
100周年

新発売

電子版も配信中

AstroArts 星月刊ナビ 編集部編

天文外史

名所江戸百景

永代橋
佃島

名所江戸百景

お江戸の夜空に星が舞う

浮世絵に 描かれた月と星

解説◎塚田 健（平塚市博物館）

江戸時代に大きく発展し、
西洋の画家にも大きなインスピレーションを与えた浮世絵。
美人画や役者絵が有名だが、
そこに“星空”は描かれてきたのだろうか？
そもそも日本人は星空を描いてきたのだろうか？
浮世絵を皮切りに「描かれた月と星」を探ってみよう。

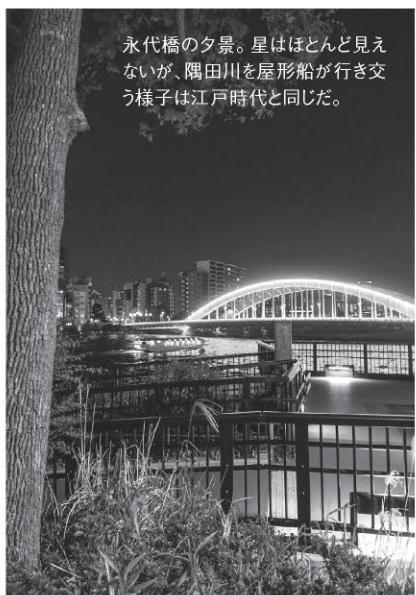
初代歌川広重画「名所江戸百景」の「永代橋佃しま」は永代橋の下から佃島（つくだじま）を遠望する構図だ。描かれているのは上弦をやや過ぎた月だろうか。佃島は永代橋の南なので、月の形と方角は概ね合っていると言えよう。（国立国会図書館デジタルコレクションより）

NHKの大河ドラマ『べらぼう～薦重栄華乃夢囃～』が絶賛放送中だ。薦重(薦屋重三郎)といえば、江戸時代中期の版元、今でいうところの出版社で、多くの作家や浮世絵師の作品を世に送り出したことで知られる。そして彼が刊行した作品の中で、最も私たちに身近なものが浮世絵ではないだろうか。

浮世絵とその歴史

浮世絵は江戸時代初期に登場したと言われる。安土桃山時代から江戸時代初頭までは、絵画といえば土佐派や狩野(かのう)派が描く屏風絵や襖絵が主流で大名や公家の庇護を受け発展していたが、その後、町人の経済力が高まるにつれ庶民階級によって風俗画が描かれるようになり、その中から浮世絵が登場した。『見返り美人図』で知られる菱川師宣(ひしかわもろのぶ)がしばしば「浮世絵の始祖」と呼ばれる。当初、浮世絵は肉筆画であったが、明和年間に多色刷りの木版画が登場することで大量生産と低価格化が進み、一気に庶民へと広まっていた。その頃に活躍したのが『風俗四季哥仙(かせん)』などで知られる鈴木春信だ。

その後、寛政年間には“薦重”にプロデュースされた喜多川歌麿(きたがわうたまろ)や東洲斎写楽(とうしゅうさいしゃらく)が登場、江戸時代後期には葛飾北斎や、広重や豊国、国芳ら歌川派が大流行する。幕末には、浮世絵がパリ万国博覧会に出



永代橋の夕景。星はほとんど見えないが、隅田川を屋形船が行き交う様子は江戸時代と同じだ。



品され、それがきっかけでヨーロッパ画壇にも広まっていった。オランダのポスト印象派の画家ゴッホが浮世絵を模写し自らの絵画に取り入れたことはよく知られている。

幕末から明治維新期にかけて、外国人の風俗に惹かれて生まれた「横浜絵」や戊辰戦争や西南戦争などを描いた「戦争画」、文明開化による社会の変化を題材とした「開化絵」などが登場するも、明治時代後期になると浮世絵は衰退してしまう。それでも渡辺庄三郎が伊東深水や川瀬巴水らを起用し新版画を制作するなどし、現在ではアダチ版画研究所などが浮世絵の技術を後世に遺すべく活動を行っている。

日本人は月が好き

平安文学に登場した月と星を紹介した2024年6月号の天文外史「平安文学に描かれた夜空の光る君たち」でも触れたが、日本人ほど月を愛してきた人たちはいないのではないだろうか。このことは文学に限らず絵画、そして浮世絵でも同じで、月が描かれてきた作品は数多くある(そして星が描かれた作品は少ない)。たとえば歌川広重が安政3(1856)～同5(1858)年にかけて描いた連作浮世絵(名所絵)の『名所江戸百景』には月が描かれた作品が6つある。風景画を多く描いた広重の作品には月が多く登場し、『名所雪月花』の「多満川(たまがわ)秋の月あゆ獣の図」や『江戸近郊八景之内』の「玉川秋月」、『京



三代目歌川国貞「西南珍聞 俗稱西郷星之図」。西南戦争を題材とした「戦争画」の一枚。西郷星とは、1877年9月に地球上に大接近した火星のこと。当時、急に明るく見え始めた星の赤い光の中に西郷隆盛の姿が見えるという噂が立った。

横浜の大佛次郎記念館で働く西宮千里は、大佛の実兄で「星の文人」として知られる野尻抱影の研究を担当することになる。野尻が十五歳で記した「初めて活字になつた」文章の可能性を感じさせるものだった。



題字・挿絵：吉原宏平

【第4回】 峯の三角標と三日月

館長室にて

西宮千里は館長室で、先輩の高岡絃子研究員と並んで奥野美樹館長の机の前に立った。

館長と口論になるのは避けたかった。自分は自分なりに見つけた資料を高岡先輩に報告しただけだ。四月から開催される野尻の企画展に新発見として取り入れてほしいなどと考えたことはないし、高岡先輩にいわれるまでそんな可能性にも気づかなかった。

ともにロング・トムで月を仰いた高岡先輩が話し始める。

「西宮さんが今回見つけてきた文献は、当館としても注目すべきものです。当館では抱影先生の書誌整理に“かげろふ”の筆名を立項していませんでした。雑誌《文庫》に抱影先生が寄稿した作品も、当館では“野尻抱影”名義の明治四一年、三〇巻一号掲載の短篇、「同情」一点しか目録に記載していません」

「それでね、西宮さん」

「はい」

と目を逸らさずに答える。少し身構えてしまったかもしれない。

「四月から始まる抱影展で紹介したいところなのだけれど、ごめんなさい、まだそれはできないのよ。できればこれからきちんと学術的な裏づけをこれから取っていきたいというのが、私と高岡さんの一致した意見なの」

どんなときでも奥野館長はおっとりと話す。ときに研究員らに厳しいこともいう人だが、決して声を荒らげたりはしない。

「はい」

「それでね、西宮さん」と奥野館長はいった。「本館の紀要に、この資料についての報告論文を書いてみる気はある？」

「はい」

千里は答えていた。隣で高岡先輩が小さく頷く。それを感じてようやく千里は館長の提案している意味に気づいた。

「といっても、いま編集している《おさらぎ選書》には、時間的にも難しいわね。この三月には校了ですもの。それに西宮さんにも編集作業をやってもらわないといけない。だから今回でなくていいい。でもこの資料をきっかけに、抱影先生の初期作品についてもっと調べて、近代文学の専門家の先生方にもお目通しいただいて、いつかぜひ紀要にあなたの名前で発表してほしい」

《おさらぎ選書》とは大佛次郎の作品目録や記念館の蔵書目録、学術的な論考、講演録などを採録するもので、これまで研究員には企画展を観た近代文学の先生方から「この研究、紀要に発表してみたら？」と勧められてきたと聞いている。実際これまでも研究員の論文発表はあったが、そ